

Hem21 NEWS

公益財団法人
ひょうご震災記念21世紀研究機構
ニュース

「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である
Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。

VOL. **75** 令和元年 (2019) 5月

CONTENTS

- 1 兵庫県音楽療法士認定証
交付式・記念講演会・実践
活動発表会を開催
- 2~3 21世紀文明シンポジウム
を開催
- 3 平成30年度の研究成果
について
- 4 令和元年度 事業計画
- 5 HAT神戸掲示板
- 6~8 人と防災未来センター
MIRAI

管理部

研究戦略センター

人と防災未来センター

「こころのケアセンター」

平成31年3月12日(火)、「平成30年度兵庫県音楽療法士認定証交付式・記念講演会・実践活動発表会」が、兵庫県こころのケアセンターで開催され、音楽療法を実践する病院や高齢者・障害者福祉施設等の職員、音楽療法士、音楽療法団体など、約120人が参加しました。

認定証交付式では、井戸敏三兵庫県知事から、新規認定者12人に「兵庫県音楽療法士認定証」が交付されました。井戸知事から、「社会福祉におけるケアのあり方は変化しており、それに対応する高度な技術が、音楽療法士にも求められている。これまで学んだことを現場で発揮していただき、心のケアの専門家として活躍を期待する」との激励の言葉と、『目に見えない 音の世界を 楽しみつつ 心の治療技法を進める』という歌が贈られました。

また、来賓を代表し、小西隆紀兵庫県議会副議長から、「音楽療法が、認知症や統合失調症の患者、がん患者の終末ケア、東日本大震災の復興支援やPTSDに悩まされている方々の心のケアなど、さまざまな現場で利用されていると聞いている。今後もいろんな場面で先輩方と共に、多世代の心身の健康維持にご尽力いただきたい。県議会としても音楽療法の定着と普及、そして、健康で安心して暮らせる地域づくりに取り組んでいく」と祝辞をいただきました。



認定審査の講評を行う鈴木氏

続いて、兵庫県音楽療法士認定審査会を代表して、鈴木暁子副委員長が、「知識面では音楽療

平成30年度 兵庫県音楽療法士認定証交付式・ 記念講演会・実践活動発表会を開催

法や対象者に対する知識、技術面では音楽療法への取り組み姿勢や音楽療法士としてのコミュニケーション能力などを重視して審査し、12人を合格とした」と審査基準を説明され、「皆さんが、音楽を本当に楽しんでこそ、クライアントも楽しめる音楽を提供できる。これまで学んだことを生かして、実践を継続し、研鑽を積むことが必要」との言葉で認定証交付式を締めくくられました。

次に、記念講演会では、長年、神経難病患者の在宅ケアに取り組み、その支援体制づくりと共に、心のケアと癒しを目指して、音楽の持つ力を医療の現場で積極的に活用されている社会医療法人財団慈泉会相澤病院脳卒中・脳神経センター顧問近藤清彦氏から、「いのちを支える医療と音楽」と題して、音楽療法の映像を交えながら講演いただきました。「たとえ身体が不自由になっても、生きがいか、生きている意味を感じられる人は幸せなのではないか。音楽はこういったところに力を与えるものである」と治療の現場で得られた貴重なお話がありました。

最後に、今回、兵庫県音楽療法士に認定された2人が施設で行った実践活動の発表を行いました。



近藤氏による講演会の様子

兵庫県音楽療法士

兵庫県では、平成11年度に音楽療法士養成事業を開始し、13年度から県独自の「兵庫県音楽療法士」の認定を行っており、31年3月までに391名を認定しました。養成講座は、当機構の兵庫県こころのケアセンターが実施しています。

音楽療法とは、「音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の軽減回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」を言います。

21世紀文明シンポジウム

「新潟県中越地震15年～人口減少・高齢社会を見据えた震災復興と教訓の伝承」を開催

2月5日(火)、新潟市民プラザ(新潟市)で「ひょうご震災記念21世紀研究機構」、「東北大学災害科学国際研究所」、「朝日新聞社」の主催で開催し、新潟県民を中心に280人が参加しました。

シンポジウムでは、中越地震被災地の現状を踏まえ、人口減少や高齢化が急速に進展する現代社会下での創造的復興はどうあるべきか、とりわけ過疎が進む地域では持続可能な復興・地域創生への道筋をどのように描くべきか、中越の経験や知見は東日本大震災や熊本地震の復興にどう生かされているのか、今後の大規模災害からの復興も視野に入れ「災後」の教訓の共有化や「災前」の備えはどうあるべきかといったことについて議論しました。

基調講演

「阪神—中越—東日本、そして—被災地連携の流れ」

講師 平井 邦彦 長岡造形大学名誉教授／
中越防災安全推進機構顧問

新潟県中越地震で起きたことは大きく二つある。中山間地の壊滅的な大地崩壊と、交通途絶による全県の機能まひだ。

中越地震の復興には、大きく八つの要因が考えられる。①阪神・淡路の苦い教訓、反省、その後の対策・研究の活用。②日本有数の豪雪地帯という地域性の作用。③迅速な復興ビジョンの策定。④運用型の復興基金。⑤中間支援組織の活動。⑥阪神—台湾—中越の連携。⑦平成の大合併。⑧被災者—行政—中間支援組織の3極構造による復興の展開である。

地震から15年が経ち、帰村率は7割。全体としては人口減が進み、高齢化率も上昇しているが、旧山古志村のように元気なところもいくつか出てきている。また、経験と教訓を未来に伝える拠点として、「中越メモリアル回廊」を整備した。

人口減少、高齢化の進行は止められないので、地縁コミュニティと、ネットワークコミュニティの二つのコミュニティの結合が鍵である。

中越の震災復興は非常にスムーズに進んだ希な例であるが、その後の震災復興につなげたかったことは、次の八つである。①目指すコミュニティ像・地域像を語り、描くこと。②迅速柔軟な復興基金を用意すること。③中間支援組織が躍動すること。④三極構造による協働復興が行われること。⑤回廊型(ネットワーク型)メモリアルをつくること。⑥被災地連携・支援を行うこと。⑦定住人口ではない新しい地域表現指標を生み出していくこと。⑧新しい復興理念、手法を生み出していくこと。

しかしながら、社会状況の変化によりつなげられないこともある。①被害が広範な東日本大震災では、復興像が描けず、コミュニティも分断されてしまった。②復興基金はリーマンショックを契機に取り崩し型になってしまった。③SNSの普及により中間支援組織が爆発的に増大したが、中核的組織が生まれず、中間支援組織が社会の1セクターとして働かなくなってしまったといったことである。

中越地震以後も地震は頻繁に起きている。中越の中山間地における震災復興を内外にアピールし、引き継いでいくことを今後も進めたい。

パネルディスカッション

「中越地震からの復興・地域創生と教訓の伝承～人口減少・高齢社会下の災害復興を見据えて」

コーディネーター 平井 邦彦 長岡造形大学名誉教授／
中越防災安全推進機構顧問

パネリスト 森 民夫	前長岡市長／ 筑波大学・近畿大学客員教授
稲垣 文彦	中越防災安全推進機構統括本部長・ 業務執行理事
田村 圭子	新潟大学危機管理本部危機管理室教授
高橋 渉	新潟日報社報道部デスク



▶パネリスト報告

森 被災者が元気になるから復興への意欲がわいてくるというのが全ての基本。人の力を引き出すということが、政策の眼目である。住民が合意に達するまで結論を急いではいけぬ。住民パワーによる復興も外から人が入ってくることが刺激となる。

稲垣 私のいる中越防災安全推進機構では、①中越地震の教訓を活かし中山間地域にITターン留学をする「にいがたイナカレッジ」、②自治体の防災施策のサポートや防災教育等を行う「地域防災力センター」、③被災地の3施設4パークを結び「震災の教訓を伝承する中越メモリアル回廊」の運営、の3つの事業を行っている。

田村 被災者への調査では、「自分が被災者だと意識しなくなった」と7割の人が答えた時点が、阪神・淡路大震災では震災後10年だったが、中越地震では7～8年。被災者自身や支援者が頑張ってきたことがこうした主観につながっているのではないかと。東日本大震災では被災3県で格差がある。

高橋 阪神・淡路大震災の被災地の神戸新聞の記者から「被災地責任」という言葉を受け継いだ。教訓を次の世代につなぐため、記事を書き続けていかなければならないと思っている。

▶意見交換概要

- 災害がきっかけで新しいことに手がついた事例も多い。復興は被災者が元気になることが最終目的。人の力をどう引き出すかを念頭に置いた政策をしっかりと立ててほしい。
- 応急仮設住宅の仕様など過去の災害で勝ち取った制度を、次の被災地にもしっかりとつなげる仕組みが必要だ。
- 復興基金はガバナンスを変えていった。新しいことをトライ&エラーでやれたことは、金額以上の役割を果たした。
- 南海トラフ地震のように複数県にまたがるような災害の復興には、シ



ステム的にあたる必要がある。また、復興について専門に考える職員を増やさなければならない。

- 応急期はもちろん復興期も長くて大変なので、復興計画の事前作成に取り組むことは大事。ここに中越地震の知見をインプットしていくことが重要だ。
- 中越地震というのは、人口減少社会の扉を開けた震災だと言える。こうした状況の中でどんな社会をつくっていくのか、共通認識をつくって取り組んでいくことが大事。

▶総括

今村 復興のビジョンは、元気な人づくり、生きがいづくりであると再認

識した。阪神・淡路大震災以後、世界は大災害を経験したが、国際的なネットワークをどのように展開していくのか、みんなで考えていかなければならない。

黒沢 一日も早い復興というのはすばらしいことではあるが、今日よりは明日、今年よりは来年はよりよくと、途中の過程が地域をつくっていく上で大事なのだと思った。

五百旗頭 大災害への対応について、危機の瞬間の全体対応と事前の総合対応の仕組みが欠けている。国として、第一線部隊の総合的な指揮系統を確立するとともに、地元の備えや取り組みを総合的に支えるため、必要な組織や体制を構築すべきだ。

平成30年度の研究成果について

東日本大震災復興の総合的検証～次なる大災害に備える～ (平成28～30年度研究)

担当：石塚 裕子 主任研究員

テーマ別(住まい、生業、生活再建支援、伝承等)復興政策の検証に加え、政府関係者、県知事および14市町の首長へのヒアリング調査等を実施しました。被害の規模、位置などにより被災は6類型に分類されましたが復興のプロセスや市町村合併の影響などによって復興の形は多様でした。長期間を要する原発事故からの復興をはじめ、さまざまな復興施策、制度が運用されていますが、それらを検証し、人口減少、老いる社会を見据えた復興思想や復興体制を再構築すべき時期を迎えていると提言しました。

東日本大震災復興の総合的検証<教育復興部会> (平成28～30年度研究)

担当：小林 悠太 主任研究員

東日本大震災復興の総合的検証の一環として、東北の教育復興の専門家による教育復興部会を組織し、東日本大震災が児童生徒に与えた影響を調査研究しました。被災3県(岩手県・宮城県・福島県)の比較事例分析や統計分析を行うとともに、政府統計や被災児童の通学に関する新聞記事について整理しました。被災状況、教職員人事、防災教育・教育復興等に対する各県の違いや、児童生徒に対する経済的支援の必要性について検討し、震災が学力や生活水準に与えた影響について明らかにしました。

地域コミュニティの防災力向上～インクルーシブな地域防災へ～ (平成29～30年度研究)

担当：石塚 裕子 主任研究員

本研究では、インクルーシブの原理的考察に加え、テーマ別課題(障害、ペット、子ども、観光)を検討した上で、事例調査、モデル地区(兵庫県上郡町赤松地区)での協働実践研究を行いました。その結果、地域コミュニティの防災力向上とは、「まちづくりに包含される〈助かる社会〉の構築である」と結論づけました。そのうえで、相互依存できる暮らしが成立する自律した生活圏において、高齢者や障害者、子ども、外国人など多様な住民の潜在力を発揮させる機会の拡大、支援(人・財政)体制について提言しました。

南海トラフ地震に備える政策研究 (平成30年～令和3年度研究)

担当：湯川 勇人 主任研究員

この研究会では、近い将来、高い確率で発生するといわれている南海トラフ地震に備えるための政策について、地震・防災学者と政治学者が一体となって検討します。今年度は、それぞれの観点から、現在の南海トラフ地震対策にはいかなる課題があるのかについて議論を重ねたほか、陸上自衛隊中部方面総監を招き、自衛隊の南海トラフ地震対策について講演頂くなど、今後検討すべき課題について整理しました。

少子高齢化社会の制度設計～年齢で人生を区別しない社会並びに子供を生み育てやすい社会の実現に向けて～ (平成29～30年度研究)

担当：劉 雯 主任研究員

人口減少と少子高齢化が急速に進む中、健康で働く意思のある限り高齢者でも仕事がある、そして女性が子供を生み育てやすい社会の実現に向けて、①高齢者の就業と貯蓄行動、②少子化対策と出生率の変化、③介護意識の変化、④経済の持続的成長軌道などについての検討と、兵庫県下の企業等を中心に優良事例の調査を行い、①高齢者の雇用拡大、②年金制度の再設計、③社会活動への参加促進、④働き方の選択肢の増加、⑤育児・介護に関する支援サービスの充実等について分析しました。

ひょうご新経済戦略研究 (平成30年～令和3年度研究)

担当：湯川 勇人 主任研究員

この研究会では、人口減少が顕著な兵庫県が今後も持続的に経済成長をしていくための政策について検討します。今年度は、現在、海外で注目されている第2層都市の議論や産業集積のあり方について整理し、広く多様な地域を持つ兵庫県の経済成長を促すうえで中心となる地域などについて議論を重ねつつ、次年度以降の本格的な研究計画について検討を行いました。

令和元年度 事業計画

1 基本方針

第4期中期目標・中期計画を踏まえ、東日本大震災復興の総合的検証をはじめ、これまでの機構の研究成果を生かしつつ、南海トラフ地震に備える政策研究や活力ある共生社会をつくる政策研究に計画的に取り組む。また、発生から25年を迎える阪神・淡路大震災の記念事業として、各センターにおいて国際シンポジウム等を開催するなど、震災の経験と教訓を活かしながら21世紀文明の創造をめざすシンクタンクとして設立された当機構の使命を果たしていく。

2 主な取り組み

(1) 研究戦略センター事業

南海トラフ地震等、国難ともなる巨大災害への備えに資する「巨大災害に備える」政策研究」及び、人口減少など諸課題を克服し、兵庫の新たな成長に資する「活力ある共生社会をつくる」政策研究」を重点的に進め、県との連携を強化しながら、研究統括や政策研究プロジェクトリーダーの指導の下、効果的な政策研究、提言を行う。

機構が有する人材や県内外の研究者等との知的ネットワークの蓄積を生かし、「～阪神・淡路大震災25年～巨大災害に備える国際シンポジウム(仮称)」や「21世紀文明シンポジウム」など、大規模災害に備える教訓の共有化や、アジア・太平洋地域の重要テーマを議論するシンポジウム等をマスメディアとも連携して開催し、研究成果等の普及・啓発に積極的に取り組む。

さらに、機構ならではの高度な学習機会を提供する「ひょうご講座」に新たにリカレントコースを設置するなど、知的交流基盤の充実を図る。また、研究成果報告会の開催や研究情報誌「21世紀ひょうご」、ニュースター「Hem21」の発行のほか、一般書籍化やITの活用など多様な媒体により、県内はもとより全国に向けて情報発信に取り組む。

2022(令和4)年3月には兵庫県史を発刊できるよう編集事業を計画的に進める。

(2) 人と防災未来センター管理運営事業

2020(令和2)年1月に震災25年となることから、震災の経験や教訓の風化を防ぎ、将来の災害への備えに生かすことができる施設として、東館3階の展示リニューアルに着手する。また、25年を契機とした特別展示や語り部のつどい(仮称)、世界災害語り継ぎフォーラムを実施するほか、東日本大震災や熊本地震、西日本豪雨等を踏まえた研究調査の継続、内閣府の防災スペシャリスト養成研修との連携など、全国さらには全世界への防災・減災情報の発信拠点、災害ミュージアム・シンクタンクとして、引き続き各機能の充実を図る。

重点研究領域(①災害初動時における人的・社会的対応の最適化、②広域災害に向けた組織間連携方策の高度化、③地域社会の復旧・復興戦略の構築)に沿った実践的防災研究の中核となる課題「中核的研究」について、2018(平成30)年度～2022(令和4)年度は、「巨大災害の縮災実現に向けた体制の創出手法」をテーマとして、センター研究員全員で取り組む。

(3) こころのケアセンター管理運営事業

災害派遣体制整備を図るため、兵庫県版災害派遣精神医療チーム(ひょうごDPAT)に対する研修およびJICA関西からの受託研修などを実施するとともに、熊本地震、東日本大震災被災地などへの地域支援活動を継続するほか、子どもの「こころのケア」に対する診療・研究体制などの強化を引き続き推進する。

「こころのケア」に携わる保健・医療・福祉などの関係者を対象に、各種課題への対処法等について学ぶ専門研修と基本的な事柄について学ぶ基礎研修を実施する。また、いのちの尊厳と生きる喜びを高めるという「ヒューマンケア」の理念に基づいた健康福祉分野を中心とした人材を養成するため、一般県民向け及び専門的人材養成の各種講座を開設するとともに、音楽療法の普及を推進する。

阪神・淡路大震災25年事業として、「兵庫県こころのケアセンター開設15周年記念こころのケア国際シンポジウム」を開催し、研究成果やこころのケア活動の状況と課題について情報発信し、普及啓発する。

ご寄付をいただきました

株式会社白山基礎(代表取締役 清原光治)様から当機構へ50万円のご寄附をいただきました。

心からお礼申し上げますとともに、ご提供いただきました資金は、当機構が研究活動を行うのにあたり有効に活用させていただきます。



「第4回貝原俊民美しい兵庫づくり賞(貝原賞)」の被表彰候補者推薦募集中

貝原賞は、前兵庫県知事・故貝原俊民氏が目指した「美しい兵庫づくり」に寄与する有意義な活動により地域社会に貢献し、今後も一層の活躍が期待される個人または団体を表彰するものです。

- 対象**：活動歴がおおむね10年以上、個人はおおむね55歳以下
- 表彰**：3件程度を対象に、賞状および副賞(個人50万円、団体100万円)
- 応募方法**：推薦書の提出が必要です。
詳しくはホームページ(<http://www.hemri21.jp/>)をご覧ください。
- 締め切り**：7月12日(金)必着
- 申し込み・問い合わせ**：(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 研究戦略センター
TEL 078-262-5713 Eメール gakujutsu@dri.ne.jp

兵庫県立美術館

特別展「印象派からその先へー世界に誇る吉野石膏コレクション」

石膏ボードを中心とした建築資材で知られる吉野石膏株式会社は、社内の創造的環境づくりを目的に、1970年代から日本近代絵画、1980年代後半からはフランス近代絵画の収集を開始しました。収集の歴史は比較的新しいものの、今や日本ならびに西洋近代美術の名品を多数所蔵し、質量ともに充実した国内有数のコレクションとなっています。

同展では、19世紀半ばのバルビゾン派にはじまり、印象派を経て、キュビズムから抽象絵画へと至るモダン・アートの展開を軸に、エコール・ド・パリの多様性にも着目しつつ、大きく揺れ動く近代美術の歴史を72点の作品によってご紹介いたします。コレクションの中核をなすのは、モネ、ルノワール、ピサロ、シスレーといった印象派の作品ですが、その充実した内容は、この運動が果たした歴史的な重要性をあらためて私たちに教えてくれます。同展では、「印象派からその先へ」と題し、印象派の挑戦とその後の美術の歴史の多様な展開を、吉野石膏コレクションの名品の数々でご覧いただけます。

- 会期＝6月1日(土)～7月21日(日)
- 観覧料＝一般1,300円、大学生900円、70歳以上650円、高校生以下無料



クロード・モネ(睡蓮) 1906年
油彩 / カンヴァス 吉野石膏コレクション



ピエール＝オーギュスト・ルノワール
(シュザンヌ・アダム嬢の肖像) 1887年
パステル / 紙 吉野石膏コレクション

コレクション展I特集「境界のむこう」

2019年度コレクション展の第1期では、「境界」をテーマとして展覧会を開催します。私たちの身の周りには、大小さまざまな境界が存在するようです。個々の境界は、緩やかに変化し、移動し、新しく生まれて消えることもあるのではないのでしょうか。しかし、境界というものが無くなることはありません。事物を区分する境界は、乗り越えることがときに困難であり、ときに不可能なこともあるでしょう。一方で、境界の存在ゆえに守られているものもあれば、さらに、境界による線引きがあるからこそ、つながりを再認識し、相互の濃密な結びつきが生まれる可能性があるのかもしれない。同展では、当館コレクションの名品を「境界」にかかわる6つのテーマに沿って展示し、多様なジャンル・時代の作品が、自分がある境界のこちら側と、むこうにある世界を見つめるためのきっかけとなります。

- 会期＝3月16日(土)～6月23日(日)
- ※前期展示:3月16日(土)～5月6日(月・休)、後期展示:5月8日(水)～6月23日(日)
- 観覧料＝一般500円、大学生400円、70歳以上250円、高校生以下無料



中辻悦子(内外) 1983年 アクリル・布
山村コレクション



舟越桂(消えない水滴) 1986年
彩色、大理石、楠木

- ◎休館日＝月曜(ただし7月15日(月・祝)は開館、翌7月16日(火)は休館)
- ◎開館時間＝10時～18時(特別展開催中の金曜・土曜は20時まで)
- ※入場は閉館の30分前まで
- TEL 078-262-0901(代) <https://www.artm.pref.hyogo.jp/>

JICA関西

◆食べることから始める国際協力! JICA関西食堂の月替わりエスニック料理

JICA関西1階の食堂(カフェテリア方式)は、どなたでもご利用できます。完全禁煙で、安心して料理を楽しめ、子供椅子もご用意していますので、お子様連れも歓迎です。毎月の月替わりエスニック料理も好評いただいております!ぜひ、お気軽にお立ち寄りください。メニューの詳細と写真については、こちら



写真は5月のハイチ料理

- <http://www.jica.go.jp/kansai/office/restaurant/index.html>
- 営業時間＝(昼)11時30分から14時まで (夜)17時30分から21時まで ※各終了30分前ラストオーダー
- 定休日＝年中無休(年末年始を除く)

月替わりエスニック料理の詳細と写真は
こちら→



◎問い合わせ

JICA関西(独立行政法人国際協力機構関西センター)総務課
TEL 078-261-0346 FAX 078-261-0342
Email: jicaksic-event@jica.go.jp
その他、詳細はJICA関西ホームページをチェック!
▶<http://www.jica.go.jp/kansai/>

日本赤十字社 兵庫県支部

日本赤十字社兵庫県支部管内において、今年度153名の新任職員が入社し、そのうち1名が兵庫県支部に配属されました。



初めまして!兵庫県支部奉仕課に配属になりました宮浦胡実(くるみ)です。実家は北海道で、大学入学を機に兵庫県に引っ越してきました。福祉と心理学を専攻した大学生の頃からボランティアや献血に興味を持つようになり、時間があれば参加していました。その中で熊本・岡山での災害ボランティアや、カンボジアの海外ボランティアを経験し、自分一人の力ではとても小さく、多くの人の働きで世の中は成り立っているのだと改めて強く感じました。同時に、医学など特別な知識のない自分でも災害救護や国際活動にかかわる仕事がしたいと考えたのが、日本赤十字社を志望したきっかけです。1日1日を大切に少しでも早く仕事に慣れ、出来ることを増やしていきたいです。

日本赤十字社兵庫県支部では、災害救護、国際救援、講習普及、青少年赤十字、ボランティアなどの事業に取り組んでいます。救急法講習やボランティア活動にご興味のある方はぜひお問い合わせください。

- 問い合わせ先:【講習】078-241-1499 【ボランティア】078-241-8922

いのちと健康を守る赤十字活動は、皆さまからお寄せいただく活動資金で成り立っています。

- 郵便局・ゆうちょ銀行からご協力いただけます
口座記号番号 01110-0-1136
口座加入者名 日本赤十字社兵庫県支部
- ※窓口で取り扱いの場合、振込手数料は無料です

◎ご寄付に関するお問い合わせ
TEL 078-241-8921(振興課)

赤十字 兵庫



情報誌やwebサイト、ロゴ制作など、
広報戦略・ブランディングの
ご相談を承ります

IDÉE INC.

株式会社 イディー
〒650-0033
兵庫県神戸市中央区江戸町85-1
ベイ・ウイング神戸ビル10F
Tel 078-331-5255 Fax 078-331-7800
E-mail info@idee-kobe.com

コミュニティ型ワーキングスペース
「ON PAPER」ははじめました!



ON PAPER

<https://onpaper.jp>

ONPAPER

新任研究員紹介

研究員 佐藤 史弥(さとう ふみや)

皆様、初めまして。4月から人と防災未来センターに研究員として着任しました、佐藤史弥と申します。この春までは、岩手大学大学院の博士課程に在学していました。初めての社会人生活に少し緊張しています。

博士課程では、土木計画や都市計画の分野で研究活動を行っていました。博士論文では、地域特性を考慮した津波避難計画の支援に関する研究に取り組み、地域の実情や課題に沿った津波避難計画の在り方について研究してきました。都市や地域は様々な防災上の課題を抱えています。それらの課題は都市ごとの地域特性や、社会構造などの要因によって多様化しています。

また、それら課題に対する様々な立場からの意見や要望によって、問題はさらに複雑化しています。今後は、人と防災未来センターの研究員として、このような複雑化する防災上の課題を解決できるような研究をしていきたいです。

さらに、災害現場での経験を積み、防災の専門家として社会に貢献できるようになりたいと思っております。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



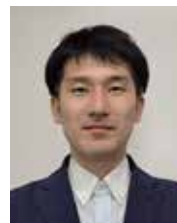
研究員 寅屋敷 哲也(とらやしき てつや)

皆様、初めまして。4月より人と防災未来センターの研究員に着任いたしました、寅屋敷哲也と申します。3月までは、東北大学災害科学国際研究所の助教として約4年間勤め、東日本大震災および熊本地震等の被災企業の事業継続・復旧・復興、災害時の官民連携(災害時応援協定や帰宅困難者対策)等を研究していました。

また、東北の産官学のメンバーが集まる防災・BCPに関する勉強会の運営や熊本の被災企業・医療機関・福祉施設等の事業継続計画の策定・改善のワークショップの実施等の社会貢献も行ってきました。

大学院時代は、関西大学社会安全研究科の1期生として修士から博士まで在籍し、企業のBCPにおける企業間連携や、南海トラフ巨大地震における電力供給制約による経済被害評価等について学際的な研究をいたしました。

今後、人と防災未来センターでは、東北で培った研究面、実践面での知見を踏まえて、関西の研究者・実務者の方々と連携して、災害に強い組織づくりに貢献したいと考えております。これからはどうぞ、よろしくお願い申し上げます。



研究員 高原 耕平(たかはら こうへい)

東遊園地のモニュメントにたまに行きます。たくさんのお名前前で言葉を失います。わたしの同級生のお名前もあります。災厄の傷跡を前にして言葉を失うのは、わたしが言葉と共に生きているからです。言葉と共に生きることは、人と生きることです。あなたは今わたしのことばを読んでくださっています。わたしも他のひとの声を聞こうとします。

また、文字を介して過去の出来事の断片に触れることができます。それは、わたしたちが時間のもとで生きているということでもあります。

他方で、人間は時間を抜け出して生きることはできず、そのもとで育ち、老い、力尽きてゆきます。めぐる季節のなかで、あるいはあまりに突然に。記憶はその流れに抗い、その流れに導かれます。こうして人間はことばと時間と記憶に縛られています。そこから抜け出そうとするけれど抜けられない。そこに人間の苦しみがあります。けれども、その動きのなかで、過去をただ過去として切り捨てないでおくことの希望も胚胎しているのだと思います。未来とはそういうことだと思っています。

4月より研究員として着任しました高原耕平といいます。専門は臨床哲学です。大学院では西宮市の復興住宅に入って聞き取り調査をしていました。災害の記憶・継承・追悼の課題に取り組みます。よろしくお願い申し上げます。



震災資料専門員 山村 紀香(やまむら のりか)

皆さん、はじめまして。4月より震災資料専門員として着任いたしました山村紀香です。出身大学は学部と大学院で異なっており、学部は関西大学社会安全学部安全マネジメント学科でリアルタイム地震学を研究し、大学院は京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻で歴史地震学を研究していました。歴史地震を研究するにあたって、古文書に記されたくずし字を解読したり、京都大学古地震研究会が開発したオンライン翻刻プロジェクト「みんなて翻刻」の運営や普及のためのアウトリーチ活動などにも積極的に参加してきました。



そもそも、私が地震や防災に関心を抱くようになったきっかけは、阪神・淡路大震災です。震災当時、私は西宮市在住で、まだ生後4ヶ月の赤ん坊でした。もちろん、震災のことはまったく記憶に残っていません。しかし、家庭や学校などで震災に関する話を聞いて育ち、震災とともにひとつひとつ歳を重ねてきました。

震災を知る最後の世代として、そして資料室の一員として、当センターが所蔵するたくさんの方の資料を来たるべき災害に向けて大いに活用していけるよう、業務に真摯に取り組んでいきたいと思っています。ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

震災資料専門員 梶浦 桃子(かじうら ももこ)

皆さま、初めまして。4月より震災資料専門員として着任した梶浦桃子と申します。この春に鳥根県から兵庫県に移り住んできました。



私は、大学院の修士課程を修了後、鳥根県の公立高校で地理の教員として2年間勤務し、さらにその後、鳥根県雲南市教育委員会で1年間勤務して現在に至ります。大学院では、人文地理学を専攻し、地域住民への聞き取り調査を主としたフィールドワークを実施して、農山村と都市間における交流人口の空間的な広がりについて分析していました。研究を通して、地域を分析する能力が身についたのはもちろんのことですが、それ以上に、どんな人ともコミュニケーションを大切にしながら信頼関係を構築していける能力が身についたことは、私の実生活においても大いに役立っていると感じています。

これまで日本は、阪神・淡路大震災、東日本大震災、平成30年7月豪雨など、数々の災害を経験してきました。我が国における防災に対する意識が高まってきているかといわれると、災害の教訓を活かして積極的に防災・減災に取り組んでいる自治体もあれば、今後起こりうる災害についてどこか自分ごととして捉えることができていない自治体や人々も多いのではないかと私は感じています。資料室が震災や防災について、気軽に話を聞くことができたり、相談できたりする空間になるように、利用者の方とのコミュニケーションを大切にして、丁寧な業務を遂行していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

観覧案内・予約 / TEL 078-262-5050 <http://www.dri.ne.jp/>

開館時間

9時30分～17時30分(入館は16時30分まで)
 ※7月～9月は9時30分～18時(入館は17時まで)
 ※金曜、土曜は9時30分～19時(入館は18時まで)

入館料金

大人	大学生	高校生／小・中学生
600円(450円)	450円(350円)	無料

[障がい者]

大人	大学生	高校生／小・中学生
300円(100円)	200円(50円)	無料

[70歳以上の高齢者] 300円(200円)

※()は20人以上の団体料金

※毎月17日(休館日の場合は翌18日)は入館無料

休館日

毎週月曜(月曜が祝日の場合は翌平日)、12月31日と1月1日
 ※ゴールデンウィーク期間中(4月29日から5月5日まで)は無休
 ※資料室の開室日についてはホームページでご確認ください

交通

鉄道

- ・阪神電鉄「岩屋」駅、「春日野道」駅から徒歩約10分
- ・JR「灘」駅南口から徒歩12分
- ・阪急電鉄「王子公園」駅西口から徒歩約20分

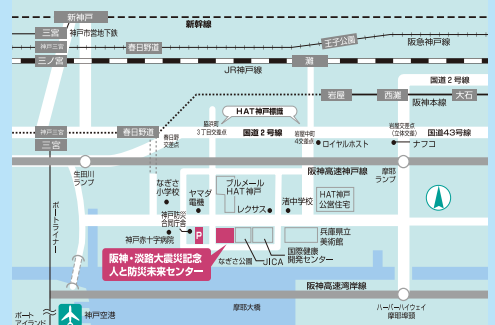
バス

- ・三宮駅前から約15分

車

- ・阪神高速道路神戸線「生田川」ランプから約8分
- ・阪神高速道路神戸線「摩耶」ランプから約4分
- ・阪急・阪神・JR「三宮」駅から約10分

●有料駐車場あり ●バス待機所(予約制/無料)あり



企画展「減災デザイン&プランニング・コンペ2019 成果展示」を開催しました

平成31年3月5日(火)～4月21日(日)まで、企画展「減災デザイン&プランニング・コンペ2019 成果展示」を西館1階ロビー(無料ゾーン)で開催しました。

「減災デザイン&プランニング・コンペ」は、一般社団法人芸術工学会が主催する「減災」をテーマとして毎年開催されているコンペで、今回は、災害に向き合う3つのフェーズ「災害が起こる前の“日常”」「災害発生直後の緊急時である“発災初動期”」「緊急時を経過したその後に関わる“応急復旧期”」の中から重要と考える課題を抽出し、その課題を克服するためのデザイン、プランニング、アイデアを提案することを重点テーマとして実施。芸術大学をはじめ、デザイン、建築、教育等を学ぶ大学生等を中心にエントリーされた提案57点を展示しました。

4月7日には、西館1階ガイダスルームを会場として「公開プレゼンテーション&2次(最終)審査会」が開催され、1次審査(書類審査)を通過した24点の提案についてのプレゼンテーションを実施し、齋木神戸芸術大学学長、森山武蔵野美術大学教授等審査員5名による審査を経て最優秀賞等各賞が選定されました。

この企画展は、デザインの立場から防災・減災に役立つ提案を行うという珍しい内容の展示ということもあってか、来館者も楽しみながらご見学されており、会場で実施した実製品化・実現を期待する提案を選ぶアンケートにも多くの方にご協力いただきました。



最優秀作品賞「生活の中のシェルター」



公開プレゼンテーション



会場(西館1階ロビー)



Hem21 NEWS
vol.75

令和元年5月発行

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2(人と防災未来センター)
<http://www.hemri21.jp/>

当機構は、以下の組織で構成しています。

●管理部

TEL 078-262-5580
FAX 078-262-5587

●研究戦略センター

▶研究調査部
TEL 078-262-5570
FAX 078-262-5593

●人と防災未来センター

TEL 078-262-5050
FAX 078-262-5055

▶学術交流部

TEL 078-262-5713
FAX 078-262-5122

●こころのケアセンター

〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2
TEL 078-200-3010
FAX 078-200-3017

ニュースレターに関するご意見・
ご感想を機構までお寄せください